

資本主義は社会主義に必ず変わる

『空想より科学へ社会主義の発展』に学ぶ

第7回 東京ブロック

ヘーゲルの弁証法の過ち

弁証法の歴史について

司会II前回は、第二章、弁証法的唯物論に入り、弁証法や形而上学について学んできたが、再度、弁証法の歴史を古代ギリシャから中世を経て、近世のヘーゲル以前まで、歴史的にもう一度整理してみようと思います。

HTさんお願いします。

HTII古代ギリシャでは、弁証法の訳語になっているように、「問答法討論術」ということになり、多数の人が論じあい、ある事柄を論証し合ったわけです。古代ギリシャの哲学者たちはい

ずれも天性の弁証家で、なかんずく博識だったアリストテレスは弁証法的思想の最も重要な形式をすでに研究していた。とエンゲルスは(52頁)記しています。

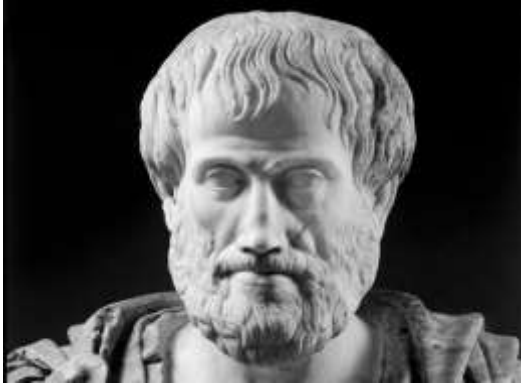
「アリストテレス(紀元前384年〜322年)によれば実体は形相と質料とからなる。例えば家の構造を形相とすれば材料が質料である。材料という質料が家という形相で実現されている。一切の存在を質料と形相との結合として、また一切の生成過程を質料が形相に転化発展する過程としてとらえた。その意味で彼は弁証法的思考の持

ち主だった。しかし、唯物論者ではない、質料を含み純粋な形相として神を想定した」と135頁の人名注で述べています。

HGIIアリストテレスは、弁証法的思考の持ち主であると同時に、観念論者だったということですか。

SIII例題にあるように、「家の構造」と「材用」との関係では、弁証法的思考の形式を持っていました。しかし、自然科学が未発達であり、自然現象等々において未解明な部分が多く、観念論にならざるを得なかった。

ほんとうの自然科学のはじまりは



アリストテレス

15世紀の後半（1492年、地理上の大発見「コロンブスの新大陸発見」1498年、インド航路発見など）であつて、それ以降は加速度的に進歩した。それで、自然をその個々の部分に分解し、深く入り込むことができた。

しかし、こういう方法は、自然物と自然過程とをばらばらに切り離して、

大きな全体的関連の外で把握するようになり、前回学習したように「形而上学的思考法」に陥ってしまったのです。HGⅡ中世のヨーロッパは、イギリスを中心にキリスト教が制圧し、王権が支配的になると、事物は変化発展するという弁証法的な見方はダメ！となる、世界は静止したものとみる形而上学的思考に移されていった。それが支配者の思想となったわけです。

OKⅡそこから、「神」が絶対だ！「王権は絶対」「王様は偉い」となる。キリスト教は国教扱いになるわけです。

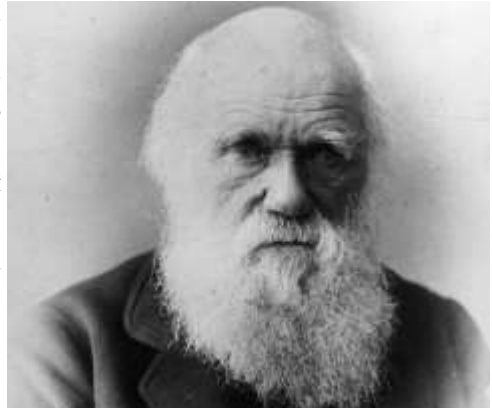
ヨーロッパにおける

思考方法の変化

司会Ⅱところで、その後観念論、形而上学的思考方法だったヨーロッパにどのような変化がありましたか。HTⅡ個々ばらばらに分解し、静止した状態で見る形而上学的思考方法でし

たが、自然科学の発展はそれらを乗り越えた。例えば、生理学の証明するところでは、死は一度に起こる瞬間的な現象（心肺停止）でなく、相当に長かかる過程です。一切の有機体は、どの瞬間においても、同一物であると同時に同一物でない。それは、その個体の細胞は刻々死滅して、新しい細胞が刻々形成されるから、こうして個体の物質は全部更新されて、いつの間にか他の物質原子がそれに代る。だから、あらゆる有機体がつねに同一物でありながら、また別物だ。と科学の発展でわかるようになってきました。

FKⅡそれは10年前に学んで分かりました。ここにHTさんがいますね。昨日のHTさんと今日のHTさんは、同じ人間に見えるが別人だ！ということですね。それは、HTさんを構成している肌や骨・臓器等々の細胞は、常に古いものは死滅し消滅する。と同時に新しい細胞が次から次へと生成さ



ダーウィン

ダーウィンの進化論

司会Ⅱその他に気づいた点はありませんか。

SIⅡ形而上学的見方に強烈な打撃を与えたのは、ダーウィンの「進化論」です。彼は、今日の一切の有機的自然科学なわち植物も動物もしたがってまた人間も、幾百年にわたる絶え間ない進化の過程の産物であることを証明し、自然についての形而上学的見解に痛打を与えました。

当時は、大変な衝撃だったと思いますね。現在でも、キリスト教のアメリカでは「ダーウィンの進化論を教えた教師が首になった」というニュースを耳にしましたが、今日では考えられないことです。

司会Ⅱしかし、当時は弁証法的に思惟する自然科学者は極めて少なかったのが主流になれなかったんです。地球の誕生、植物・動物の誕生は、神が与え

たものでなく、自然の運動過程の中から発展してきました。自然は弁証法的に変化し発展することが証明されたわけです。ここまでは、前回の復習部分です。

カントとヘーゲルの弁証法

司会Ⅱ今回は、57頁〜60頁部分です。ヘーゲルの弁証法を中心に学習しますが、マルクス・エンゲルスが学び、取り入れた新しいドイツ哲学を学習したいと思います。当時の自然科学の進歩、ニュートンの登場によりドイツの哲学にも影響を与えます。カントです。彼はどのように弁証法を検証しましたか。HTTⅡ司会者が言うように、人類の発展も、人間の頭脳が描く映像も、弁証法的方法によって、その生成と消滅その進歩と退歩との一般の相互作用についての不断の観察によってできるものであることがわかりました。

れる。だから、厳密には昨日と今日では別人となるが、今日では皆さんもわかるように個々人にDNAがあり、同一人物になるようになっていきます。司会Ⅱ有機体内部では、常に、生成し変化し、消滅する。また新たに生成される。外部とも連関し、交互作用を繰り返して、「弁証法的」に変化し発展していることはわかりましたね。



カント

化してゆく時代に、ベルリン大学教授となり、新しい哲学を国定哲学の位置まで高め、ドイツ哲学を完成させました。「自然」と「歴史」と「精神」の全世界がここにはじめて一つの過程として説明されるようになった。これこそ、彼の偉大な功績であったと、エンゲルスは称えています。

OKIIヘーゲルは、自然と歴史と精神の全世界がはじめて一つの過程として説明することができた。そして、不断の運動、変化、発展の中にあるならば、その運動の内的関連の証明も試みなければならぬ必然性に至るわけです。しかしヘーゲルは、唯物論者ではなかった。サン・シモンにも劣らない、当時の最も博学な学者であったが、彼とても、第一に彼自身の知識の範囲に限られていた。第二に彼の時代の知識

彼は、力学の祖と言われたニュートンの「神の一撃」（ニュートン力学によれば、静止しているものが運動をはじめするには必ずその外部に原因がなければならぬ。宇宙全体の運動の第一は神の一撃から始まるとみた）を批判・否定した。

そして、太陽もすべての惑星も回転する星雲から生じたものだということになりました。そして太陽系がこのようにして発生したものならば、将来そ

れが死滅することもまた必然だと彼はそのとき考えていました。

SIIIカントはドイツ哲学の中に、生成と消滅、進歩と退歩、一般的相互作用という弁証法の基礎部分を形成したといっているでしょう。この新しいドイツ哲学は、かの著名なヘーゲルの体系で完成をみるのです。

マルクスよりちよつと早く生まれたヘーゲル（1770〜1831年）は、ナポレオン戦後ヨーロッパ全体が反動

自然、歴史、精神の全世界は一つの過程として不断に変化し、運動し、発展すると主張しました。

司会IIヘーゲルが発展の法則として弁証法まで高めたことは偉大な功績と認めつつ、ヘーゲルの弁証法の不十分さ、間違いはどこにあったのですか。分かりますか。

観念論者であったヘーゲル

と見解もその広さと深さに限界があった。その上なお第二の制約があった。ヘーゲルは観念論者であったために、運動の内的関連を解き明かす間違いをおこします。

GOII 観念論者であったためですか？
「観念論」と「唯物論」の違いについて教えてください。

OKII 思惟と存在、精神と自然の関係の問題について、何が本源的か、精神かそれとも自然かという問題にどう答えたかに応じて、哲学者たちは二つの大きな陣営に分裂したのです。

自然に対する精神の本源性を主張した哲学者は観念論の陣営をつくりました。自然を本源的なものとした人々は唯物論のさまざまな学派に属することとなります。第一章の学習の時に、HKさんの資料にも出ていたと思います。FKII 自然を本源的とする人々は唯物論、精神・思惟が本源的という陣営は観念論ということですね。

思惟と存在の関係

司会II ここではもう一つの側面も見ることがあると思いますが・・・。

OKII 思惟と存在の関係です。それはわれわれを取り囲んでいるこの世界そのものとのどんな関係があるかです。唯物論者は、思惟とは外界を模写したに過ぎないと考え、自分以外の人間も自然の一部と捉えます。

それに対し、ニュートンの「最初の一撃」が端的に示しているように、宇宙創造のはじめを神にたよる。カントでさえ、宇宙の発展が「引力」と「反発力」によってもたらされていると、弁証法的な考えに道を拓いたにも関わらず、この矛盾を説明できず、不可知論に陥ってしまうのです。カントの有名な認識不可能な「物自体」の本質は、見抜けない。われわれの極めて断片的な認識では背後に何かまだ神秘的な「物自体」があるかも知れないのだという

わけだ。

私たちの目の前に写る客観的実在は、人間の直観なり、悟性なり、感性を働かせて意識するのですが、そこに写った本質的な存在は認識できないとして、神のみぞ知る、とする観念論者もいるのです。

司会II もっと分かりやすく具体例で説明して下さい。

FKII 目の前に缶コーヒーがあるから缶コーヒーと認識するのは当然ですね。缶コーヒーかどうか認識できないとはおかしくないですか？昔、学習会の時にこんな話がありました。Aさんの後にBさんがいて、いきなりBさんがAさんの頭を後から叩いた。Aさんは後が見えないし叩かれたかどうか分らない。痛いと思うから痛いんだ！という屁理屈は通らないという話です。

司会II 少し滑稽な例題でしたね。ヘーゲルの場合は、どう捉えたのでしょうか。

◆みんなの学習講座

ヘーゲルの思考方法

OKII彼の頭のなかの思想は、現実の事物や過程を抽象してできる模写でなく、それとは反対に、事物とその発展は、世界そのもの以前にどこかにあらかじめ存在している「理念（イデオロギー）」が模写して現われているものと結論つけるほかなかったわけです。観念論者であったがゆえ、客観的物質の存在の説明は、人間が存在する以前にあった理念は「絶対的真理」の模写として頭脳に写しだされているのだと片づけられ、一切のものは逆立ちさせられ世界の現実の関連は完全に転倒されてしまったのです。

しかし一方で、人間の歴史は一つの発展過程であるという歴史観を本質的な前提としていました。それならば、いわゆる絶対的真理を発見してそれをもつてその知的結論とすることはできないはずのものであったのです。

この矛盾をヘーゲルは自分の体系こそは「絶対的真理の精髓だ」といったのです。自然と歴史の認識の一切を包括するところの永久に完成した体系などというものは、そもそも弁証法的思惟の基本原則とは両立しません。だから、ヘーゲルの弁証法は逆立ちしている、と言われていっているのです。

司会IIわかりましたでしょうか。

OKIIこのテキストには出てきませんが、ヘーゲルの弁証法は観念論だからだめだと否定して唯物論に近づいた哲学者にフオイエルバッハという人物がいます。なかなかいいところまでいきました。フオイエルバッハは、『キリスト教の本質』を著し、ヘーゲル哲学の本質は合理的思考の外皮をまとったキリスト教神学に他ならないことを暴露しました。キリスト教の神々は人間の本质が疎外された姿であるとしてとらえ、唯物論に進みました。しかしまだこの唯物論は未熟で、ヘーゲルの観

念論といつしよに、弁証法まで否定してしまします。

司会IIそこから、どうなるのでしょうか。

唯物弁証法の登場

OKIIそこで、マルクスとエンゲルスは、フオイエルバッハの機械的、静止的唯物論を否定することによってヘーゲルの弁証法を取り出し、唯物弁証法を完成させたのです。この完成は『哲学の貧困』から『資本論』へと導かれていきます。

結論から言えば、マルクスとエンゲルスはヘーゲルの古典、ドイツ哲学とフランスの社会主義（素朴唯物論）に学び、近代唯物論として、弁証法的唯物論を完成させたのです。

司会IIありがとうございます。次回は、60頁以降の「歴史の発展法則」の概略について学びます。